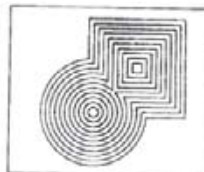


# モノグラフ・高校生'93

vol. 38 私立高校教師



上智大学教授	武内 清
上智大学大学院生	河野 銀子
上智大学大学院生	深谷 野亜
上智大学大学院生	木村 治生

上智大学大学院生	西村 幸満
上智大学大学院生	菊地 みほ
静岡大学教授	深谷 昌志

## ●目次

はじめに	2
本報告書の要約	3
第Ⅰ章 調査の意図と対象者の属性	
1. 調査の意図	6
2. 調査の方法	7
3. 調査対象者の特性	7
第Ⅱ章 私立高校教師の特性	
1. 私立高校教師と公立高校教師の違い	10
2. 勤務校に対する意識	13
3. 母校出身の教師	17
第Ⅲ章 私立女性教師	
1. 女性教師の属性と生活時間	20
2. 授業の形態	21
3. 生徒とのコミュニケーション	24
4. 女性教師が抱える悩み	26
第Ⅳ章 私立進学校教師の実像	
1. 学校格差別にみた私立高校教師の属性	30
2. 教師研究における学校格差という視点	30
3. 進学校教師の特性	31
4. 私立進学校にみる指導	35
5. まとめ	40
第Ⅴ章 併設タイプ別にみた私立高校の教育	
1. 私立高校の併設タイプ	41
2. 併設タイプ別にみた教育の特徴	43
3. 併設タイプ別にみた教師の意識	48
第Ⅵ章 私立高校教師の悩み・不安	
1. 教師の悩み	48
2. 教師の不安	51
3. 勤務校への満足度	52
4. まとめ	56
第Ⅶ章 職業としての私立高校教師	
1. 私立高校教師の役職	57
2. 教師のあり方にみる教師観	60
3. 勤続意識と転勤・転職意識	62
高校教師からのコメント	
公私の違いに注目	64
学校満足度と生徒への愛着	65
一期一会の教師	66
公立高校に勤めて	67
私立高校と公立高校の差異	68
「ある先生からの手紙」——国際化について考える——	70
おわりに	71
資料1 調査票見本	73
資料2 基礎集計表	85

\*おことわり 本文中に使用した写真は、本文・テーマとは一切関係ありません。

## ●はじめに

これまで当研究会では、過去に2回ほど、高校の先生方にアンケートをお願いして、高校の先生方の教育観やライフスタイルを垣間見てきた。

1983年の調査（『モノグラフ・高校生'83』vol.10）では、先生方の教育観が年齢や学校格差によって大きく変わっていく様子が明らかになった。例えば平均で見ると、20歳代では教職には自信がないが生徒が大好きな「モラトリアム教師」が多いが、30歳代になると教職への自信はまだもてないまま、生徒との距離が大きくなっている「スランプ教師」になり、40歳代になると生徒との距離はそのまま、役職につき教職に対して自信をもつ「達観教師」、50歳代になると教職への自信と同時に子どもへ親近感をもつ「円熟教師」となる。また、進学校の教師は教職に自信があり、非進学校の教師は自信をもてないというように、学校格差によって教職への自信が左右されるという実態も明らかにされた。

1990年の調査（『モノグラフ・高校生'90』vol.28）では首都圏の公立高校の先生方の生徒観とライフスタイルの実態を具体的に示した。ここでも年齢や学校格差によって、先生たちの意識や行動が違って来る様子が示された。若い先生ほど生徒への指導は積極的になる、非進学校の先生ほど生徒との距離を近くにとり、積極的に生徒にかかわっていく傾向があるなどが明らかになった。また、公立高校の先生たちは高校教師に必要な能力として、教科指導より生活指導の能力をあげる教師が多かった。

1992年に実施した今回の調査は、私立高校

の先生方を対象にしたものである。ここ数年私学ブームがいわれ、小、中、高、大学のどの段階でも私学の人気は高まった。とりわけ、今回調査対象にした1都3県では私学の占める割合は高く、高校でも36.6%が私立高校で、有名大学進学率でも私立高校が有利になっている。それに対し公立高校もさまざまな改革を行い巻き返しをはかっている。そういう中で、教育の中核を担う先生たちは、公立と私立では、どのような教育観や意識の違いをもっているのだろうか。また私立は、公立以上に多様性に富んでいるが、その多様性は先生たちの授業行動やライフスタイルにどのように反映しているのだろうか。

以上のような点を、首都圏の私立高校の先生方の回答から考察したのが、本報告である。公立高校との比較も随所に行った。

お忙しい中、煩雑な質問にお答えいただいた多くの先生方に感謝したい。アンケートという調査方法による限界、また分析者が私学関係者（上智大学教員、院生）という偏りもあり、必ずしも私立高校の先生の現状を正しく把握したとはいえないかもしれない。ご批判をいただき、さらに分析を深めていきたい。

### 本書の執筆分担

武内 清	I章
木村治生	II章、V章
深谷野亜	III章
河野銀子	IV章
菊地みほ	VI章
西村幸満	VII章

## 本報告書の要約



### 第Ⅰ章 調査の意図と対象者の属性

- ① 本調査は、私立高校教師の実像を明らかにしようとしたものである。調査内容は、勤務のきっかけ、満足度、授業行動、生活指導、同僚関係、教師観、悩み、不安などである。
- ② 調査対象は1都3県（東京都、神奈川県、埼玉県、千葉県）の私立高校教師6,500名である。調査は郵送法により、1,429名の回答を得た（回収率22.0%）。調査時期は、1992年9月である。
- ③ 首都圏の公立高校教師との比較（『モノグラフ・高校生'90』vol.28「高校教師の生徒観とライフスタイル」）、性別、出身学校別、学校格差別などの比較を通して、現代の私立高校教師の生活と意識の特質を明

らかにしようとしたものである。

### 第Ⅱ章 私立高校教師の特性

- ① 公立高校教師と比較すると、私立高校教師は、1) 女性が多い、2) 40歳以上のベテラン教師が多い、3) 勤務地が東京に集中している、4) 高校・大学を通じて私学で教育を受けた者が多い、5) 進学率の高い学校に勤務する者が多いなどの特徴がある。
- ② 私立高校は、身近な人間関係を媒介にして教師を集めている。また、異動がないため公立高校に比べて勤務年数の長い教師が多い。
- ③ 私立高校教師は、心理的に充実できるという点に魅力を感じて勤務校を決定している者が多い。

---

④ 私立高校教師は、自分にあつた私立高校を見つけて、定年まで教師を続けるというスタイルを志向しており、それが可能である勤務校に対して、高い満足度を維持している。

⑤ 母校を勤務校とする教師は、あらかじめ学校についての情報と愛着をもっているため、他の高校をでた教師よりも、満足度は高い。

### 第Ⅲ章 私立女性教師

① 私立高校の女性教師は、男性教師に比べて年齢的に若く、またキャリア的にも短い者の割合が多く、大学院卒が少ない、という特徴をもつ。

② 女性教師の場合、きめ細やかな指導や生徒とのコミュニケーションを密にしようとする姿勢がみられる。一方、男性教師は生徒を管理する役割を担っている。つまり、男性教師は伝統的な父親、女性教師は母親の役割分業を踏襲した形となっている。

③ 教職に関わる悩みについて、女性教師のほうが悩みを抱えている割合が高い。

### 第Ⅳ章 私立進学校教師の実像

① 私立進学校における教員構成の特徴は、若手が少なく、男性が多く、母校出身者が多い。これによって独自の教員文化が形成されている。

② 私立進学校における教師は、勤務校に対する不安が少なく、満足している。

③ 生徒に問題が少ないため、教師は授業という本質的営為に集中できている。受験の手段としての密度の濃い授業が展開されている。

④ 私立進学校の教師は生徒に密着しようとせず、あるいはその必要がなく、ドライな関係を保っている。

⑤ 私立進学校には、教師間に愛校心が形成されやすい風土が生み出されている。

### 第Ⅴ章 併設タイプ別にみた私立高校の教育

① 私立高校を、併設校の有無・併設状況（小、中、大学のどの段階を併設しているか）によって4タイプに分類すると、1）高校単独校（高校のみ）20.0%、2）中高一貫校（中・高型）30.0%、3）大学附属校（高・大型）11.7%、4）エスカレーター校（小・中・高・大型）17.0%となる。

② 高校単独校の教師は、生徒を引きつける授業を行う努力をしている。また、自ら積極的に生徒との交流をはかっている。

③ 中高一貫校の教師は、入試に役立つことを重視して、進学校に特有の授業を行っている。

④ 大学附属校の教師は、教科書中心の授業をしている。生徒との交流が少ない反面、生活指導面の活動は活発である。

⑤ エスカレーター校の教師は、生徒とのコミュニケーションが緊密で、信頼関係を築いている。そのため、生活指導は生徒の自主性に任せてあまり行っていない。

---

## 第Ⅵ章 私立高校教師の悩み・不安

- ① 教師の悩みとしては、「雑用が多すぎる」「研修の機会が少ない」ということが多い。授業への準備や生徒とのふれ合いの時間が少ない悩みをかかえている。
- ② 若年層の教師に悩み・不安が多く、年齢の上昇とともに、これらの悩み・不安は解消していく。それは、教師としての力量に自信をもてるようになったということにもよるが、同時に授業やクラブ指導に対する意欲の減退、慣れから生じる向上心の喪失にも起因している。
- ③ 下位校の教育困難校の教師は、悩みや不安が大きい。
- ④ 教師の異動が少ない私立高校では、教師集団の凝集性が高まると同時に、閉鎖性も高まり、悩みや不安の原因となることがある。

## 第Ⅶ章 職業としての私立高校教師

- ① 私立高校教師には部長や主任といった役職についていない者が半数近くいる。50歳以上になって、その割合は3割台となる。
- ② 教科によってついている役職に違いがある。校長・教頭は英語と理科の教師に多い。
- ③ 公立高校教師に比べ、私立高校教師は「専門性の高い授業をする」ことを重要な教師役割として考える者が多い。
- ④ 教師継続意識を9割がもっている。別の学校への転勤希望をもつ者が2割強、別の職業への転職意識をもつ者も1割いる。授業に対する自信のある者、教師という職業が向いていると思う者、現在の学校に満足する者が継続意識が強い。

---

### 〔調査概要〕

回答数●東京都、神奈川県、埼玉県、千葉県私立高校教師1,429名

(男性1,015名、女性414名)

時 期●1992年9月

方 法●郵送法

# 第Ⅰ章 調査の意図と対象者の属性



## 1. 調査の意図

東京、大阪などを中心とした大都市圏では、他の地域に比して私立高校の学校数は多く、生徒数も多い。国公立を含めた全高校に占める私立高校の割合は、全国平均が23.9%であるのに対して、今回、調査を実施した4都県の平均は36.6%（東京52.1%、神奈川28.6%、埼玉22.2%、千葉26.2%）である（文部省『平成3年度学校基本調査報告書』）。しかも、これら都県の私立高校は、必ずしも公立高校を補完する役割を果たしているわけではなく、むしろ、その社会的な地位は高まっている。例えば、中高一貫進学校の有名大学合格者数に象徴される進学実績では、公立高校を凌駕する勢いである。また、私立高校は独自の伝

統やカリキュラム編成を通じて、公立高校にはない個性的なスクールカラーを打ち出して成功している学校も多い。

私立高校を公立高校の「すべり止め」として選択するのではなく、それらを積極的に選択する層が確実に拡大している。都心部の小学生の場合、3人に1人が私立中学への進学を希望しており（『中学受験』『研究所報』vol.2、福武書店、1989）、義務教育の中学段階でも「私学志向」が高まっている。

今回の調査は、こうした私学ブームの顕著な首都圏で実施している。したがって、他の地域にある私立高校よりも、恵まれた環境にある学校が多いことを考慮しなければならな

い。しかし、対象を首都圏に限ったことで、現在の「人気」を支える私立高校の特徴がより明確になるものと考えられる。

現在の私学ブームは、私学の進路実績や入学してくる生徒の質の向上からいわれることが多い。しかし、教育の質を考えると、教育をする教師の側の特質こそ問われなければならない。

私学の教師の素質、熱意、授業の質、部活動、生徒指導の実態はどうなのだろうか。私立校の教師と公立校の教師を比較し、その優劣のみならず、それぞれの特徴を明らかにして、私学ブームの内実を明らかにする作業はぜひ必要である。

当研究グループは、幸い3年前（1989年7月）に、東京を中心とした1都3県の公立高校教師を対象にした調査を実施してきた（『モノグラ

フ・高校生'90』vol.28「高校教師の生徒観とライフスタイル」福武書店）。それとの比較で、私立高校教師の特質を示すことが可能となった。

調査項目は、公立高校教師のものとはほぼ同じとし、一部私立高校に独自の項目（採用のきっかけ等）をつけ加え、一部削除した。

分析の視点として、次のような2つを留意した。

① 公立高校教師のデータと私立高校教師のデータを比較し、私立高校教師の特質を明らかにすると同時に、公私を問わず、現代の教師に共通する特質にも注目する。

② 私立高校は公立高校以上に多様であり、私立高校教師の多様性にも注目する。とりわけ、性別による違い、高校格差による違い、また併設校タイプによる違いも考察の対象にした。

## 2. 調査の方法

調査対象は1都3県（東京都、神奈川県、埼玉県、千葉県）の私立高校教師6,500名である。調査は郵送法により、1,429名（回収

率22.0%）の回答を得た。調査時期は、1992年9月である。

## 3. 調査対象者の特性

今回の調査に回答を寄せた1都3県の私立高校教師の基本的属性は、以下の通りである。

(1) 性別 (数字は%)

男 性	女 性
71.0	29.0

(2) 年齢

25歳以下	26～30歳	31～34歳	35～39歳	40～44歳	45～49歳	50～59歳	60歳以上
4.7	14.9	14.7	14.1	15.1	11.1	19.4	6.0

(3) 担当教科

英語	国語	数学	社会	理科	芸術	家庭	体育	その他
17.2	18.1	14.1	16.5	14.5	3.5	3.5	8.0	4.6

## (4) 出身高校

母校	母校以外の私立高校	公立高校	国立高校	その他
12.0	30.3	56.2	1.3	0.2

## (5) 出身大学

教育系大学 (国公立)	教育系大学 (私立)	教育系以外の大学 (国公立)	教育系以外の大学 (私立)	短期大学	その他
8.4	12.5	9.5	67.3	0.5	1.8

## (6) 出身大学院

行っていない	教育系大学院 (国公立)	教育系大学院 (私立)	教育系以外の大学院 (国公立)	教育系以外の大学院 (私立)	その他
78.6	1.3	0.8	3.0	14.2	2.1

## (7) 新卒からの勤務か

はい	いいえ
55.4	44.6

## (8) 現在校勤務年数

1～3年目	4～6年目	7～9年目	10～15年目	16～20年目	21～29年目	30年目以上
13.9	12.0	13.2	17.9	13.2	20.0	9.8

## (9) 勤務校所在地

東京	神奈川	埼玉	千葉
65.5	15.2	6.7	12.6

## (10) 併設パターン

小中高大(短大)併設	中高だけ	高校・大学だけ	高校だけ	その他
17.0	30.0	11.7	20.0	21.3

## (11) 勤務校の4年制大学進学者の割合

30%以下	30～59%	60～79%くらい	80～89%くらい	90%以上	よくわからない
38.3	14.4	13.7	9.1	23.7	0.8

## (12) 平成4年度センター試験の受験者の割合

1割以下	2割くらい	3割くらい	半数くらい	7割くらい	ほぼ全員	よくわからない
67.0	13.2	8.0	3.4	1.1	1.5	5.8

## (13) クラブ顧問

運動系	文化系	その他	なし
41.4	44.8	1.3	12.5



(14) 現在の学校での役職（主任または部長）

校長・ 教頭	教務	総務	進路 指導	生活 指導	厚生・ 保健	学年	その他の 主任・部長	主任または部 長ではない
2.2	5.3	2.0	5.7	5.2	1.2	11.4	17.0	50.0

(15) 結婚・家族

未婚	既婚・子どもなし	既婚・子どもあり	その他
28.3	11.7	59.2	0.8

## 第Ⅱ章 私立高校教師の特性



本章では主に、「私立高校教師」の特性を公立高校に勤務している教師との比較を手がかりに考察することにする。なお、公立高校教師のデータは前回調査（「高校教師の生徒

観とライフスタイル」『モノグラフ・高校生'90』vol.28、1990）を用いるが、今回の調査に合わせて無回答・不明票を除外し、有効票のみを母数としている。

### 1. 私立高校教師と公立高校教師の違い

ここでは、私立高校教師と公立高校教師の間にみられる目立った違いを確認しておく。表Ⅱ-1は、性別、年齢別、勤務地別に公私の差異をみたものである。この表から、私立高校教師の特性について、以下の点が明らかである。

① 性別——女性教師の割合は、公立よりも私立高校に高い。これは、私立高校の中に女子校が含まれているためと考えられる。

② 年齢——私立は40歳以上のベテラン教師が多く（51.6%）、公立では39歳以下の教師が多い（57.2%）。さらに、私立には60歳以上の教師が6%もいる。このため、私立高校の教師は、全体的に年齢層が高くなっている。

③ 勤務地——公立高校教師は、各都県とも20%台で大きな偏りがないのに対して、私立高校教師は65.5%が東京都に集中している。

しかし、これは東京都にある私立高校数からみて、とりわけ高いとはいえない。ちなみに、調査4都県の私立高校数は合計で419校（100%）だが、東京都244校（58.2%）、神奈川74校（17.7%）、千葉54校（12.9%）、埼玉47校（11.2%）となっている（文部省、前掲）。

次に出身学校（表Ⅱ-2-1、Ⅱ-2-2）であるが、おおよそ以下の点が指摘できよう。

① 私立高校教師は、高校・大学と通じて私学で教育を受けている者が多い。「私立高校出身者」は42.3%（「母校出身」+「他の私

立高校出身」）である。私立高校の割合は、全国平均で23.9%、首都圏でも36.6%であったから、この数値はかなり高い。さらに、出身大学では、「私立大学出身者」が全体の8割を占め、「国公立大学出身者」の4.5倍もいる。一方、公立高校教師の場合、「私立大学出身者」は「国公立大学出身者」の1.4倍にすぎない。

② 私立高校教師は、公立高校教師に比べて大学院出身者が多い（公立7.9%、私立19.3%）。

最後に、私立高校教師が勤務する学校の状況を見ておこう。まず、私立は比較的進学校

表Ⅱ-1 性、年齢、勤務地 × 私立・公立

(%)

	性別		年齢					勤務地				
	男性	女性	30歳以下	31～39歳	40～49歳	50～59歳	60歳以上	東京都	神奈川県	埼玉県	千葉県	その他
私立高校教師	71.0	29.0	19.6	28.8	26.2	19.4	6.0	65.5	15.2	6.7	12.6	0.0
公立高校教師	80.5	19.5	20.7	36.5	25.5	16.6	0.7	27.2	28.1	21.0	23.4	0.3

表Ⅱ-2-1 私立高校教師の出身学校（各学校段階）

(%)

	出身高校				出身大学					大学院		
	母校	他の私立	公立	その他	教育系国公立	教育系私立	教育系以外国公立	教育系以外私立	その他	行った	行かない	その他
私立高校教師	12.0	30.3	56.2	1.5	8.4	12.5	9.5	67.3	2.3	19.3	78.6	2.1

表Ⅱ-2-2 公立高校教師の出身学校（最終学歴）

(%)

	最終学歴					
	教育系国公立	教育系私立	教育系以外国公立	教育系以外私立	大学院	その他
公立高校教師	18.9	8.4	19.4	43.3	7.9	2.1

が多い。4年制大学進学者の割合が90%を超える学校は、公立10.4%に対して、私立は23.7%である。しかし、進学者割合が30%以下の学校も約4割あって、私立高校には様々なタイプの学校があることをうかがわせている(表Ⅱ-3)。さらに、私立高校教師の勤務校は、中高一貫校タイプ(30.0%)、小学

校から大学まで併設校をもつエスカレーター校タイプ(17.0%)、大学附属校タイプ(11.7%)、高校のみで他に併設校をもたない単独校タイプ(20.0%)と、バラエティーに富んでいる(表Ⅱ-4)。これは公立高校の大部分が、他に併設校をもたない学校であることと対照的である。

表Ⅱ-3 4年制大学進学者の割合

(%)

	30%以下	30~59%	60~79%	80~89%	90%以上
私立	38.3	14.4	13.7	9.1	23.7
	^		v	v	v
公立	61.2	13.8	8.5	4.7	10.4

表Ⅱ-4 併設学校

(%)

	小中高大	中高だけ	高大だけ	高校だけ	その他
私立	17.0	30.0	11.7	20.0	21.3

## 2. 勤務校に対する意識

現在勤務している学校が決定するまでの過程は、公立と私立で大きく異なっている。公立高校に勤務する場合、自ら学校を選択する余地は少ない。それに対して、私立高校の場合、勤務校の最終的な決定権は、概ね本人にあるといつてよいであろう。そのため、ある程度納得して勤務校を選択、決定していると考えられる。また、公立高校の教師は、在職中に数回の異動を経験する。しかし、私立高校の場合は、異動がほとんどない。したがって、基本的には教員スタッフが固定されている。こうした私立の特徴は、個性的な教育方針を実践化していくうえで、かなり有利である。

表Ⅱ-5は、私立高校の教師に「現在の高校に勤務するきっかけ」を聞いたものである。これをみると、公募がきっかけの者は13.1%にすぎず、私立高校には身近な人間関係を媒介にして人が集まっている。その中でも、4

人に1人が「大学の恩師に紹介された」としており、大学の教員が、教師志望の大学生と私立高校を結びつけるパイプ役を果たしていることがわかる。

さらに、図Ⅱ-1は、「現在の学校での勤務年数」を聞いたものを公立・私立別に示してある。現在の学校に赴任してから「7年以上」になる教師は、公立高校では40%を下回るが、私立高校では74.1%と2倍に近い。私立高校には異動がないため、同一校での勤務年数が相対的に長くなっている。このように勤務年数が長いとき、学校の魅力に乏しかったり、教員スタッフの満足度を高く維持できなければ、学校は種々の実績を上げることが難しくなる。そのため、私立高校には、多くの教師を引きつけ、満足させるような要素が不可欠である。

それでは、私立高校教師たちは、勤務校の

表Ⅱ-5 現在の学校に勤務するきっかけ

(複数回答)

(%)

大学の恩師に紹介された	24.6
先輩・同僚にさそわれた	16.5
非常勤講師をしていた	14.1
校長にさそわれた	13.4
募集の案内を見て応募した	13.1
大学の就職係に紹介された	11.8
自分の母校だから	9.3
高校の恩師に紹介された	6.7
理事長にさそわれた	3.4

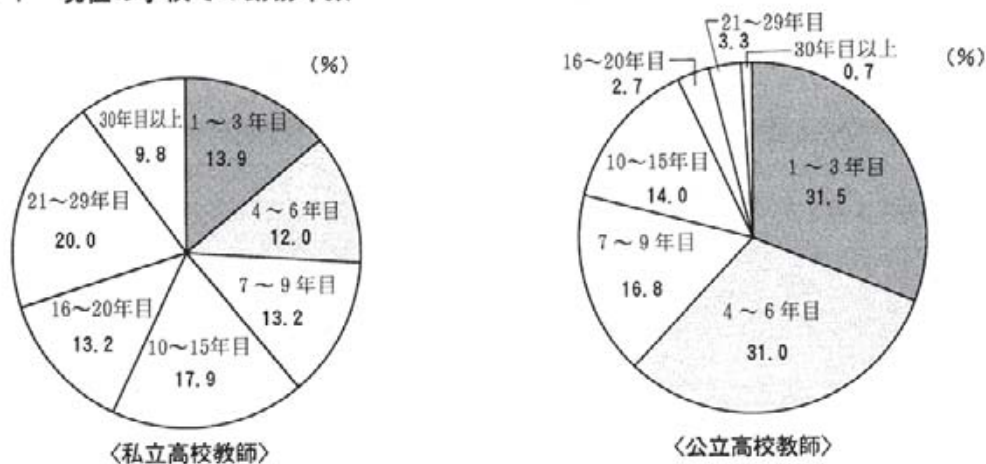
決定に当たって、主にどのような点に魅力を感じたのだろうか。さらに、現在の満足度はどの程度のものなのだろうか。

まず、現在の学校に感じた魅力（図Ⅱ-2）は、「自分の力が十分出せそう」（59.1%、「とてもそう」+「かなりそう」の合計、以下同じ）や「建学の精神に共鳴した」（35.9%）など、心理的に充実できる学校であるという点である。その一方で、「教育設備が整っている」（15.7%）、「生徒指導にあまり気をつかわなくてよい」（20.8%）、「ネーム

バリューがあり評判が高い」（21.4%）など教育環境のよさを問う項目や、「定年の年齢が高い」（17.9%）、「給与などの待遇がよい」（24.3%）など勤労者としての待遇のよさを問う項目は、それほど重要視しているとはいえない。

次に、私立高校教師の満足の種類（図Ⅱ-3）であるが、「とても」と「かなり」を合わせて、ほぼ60%が勤務校に「満足している」と答えている。さらに、「定年まで」現在の学校に勤務しようと考えている者が64.4

図Ⅱ-1 現在の学校での勤務年数

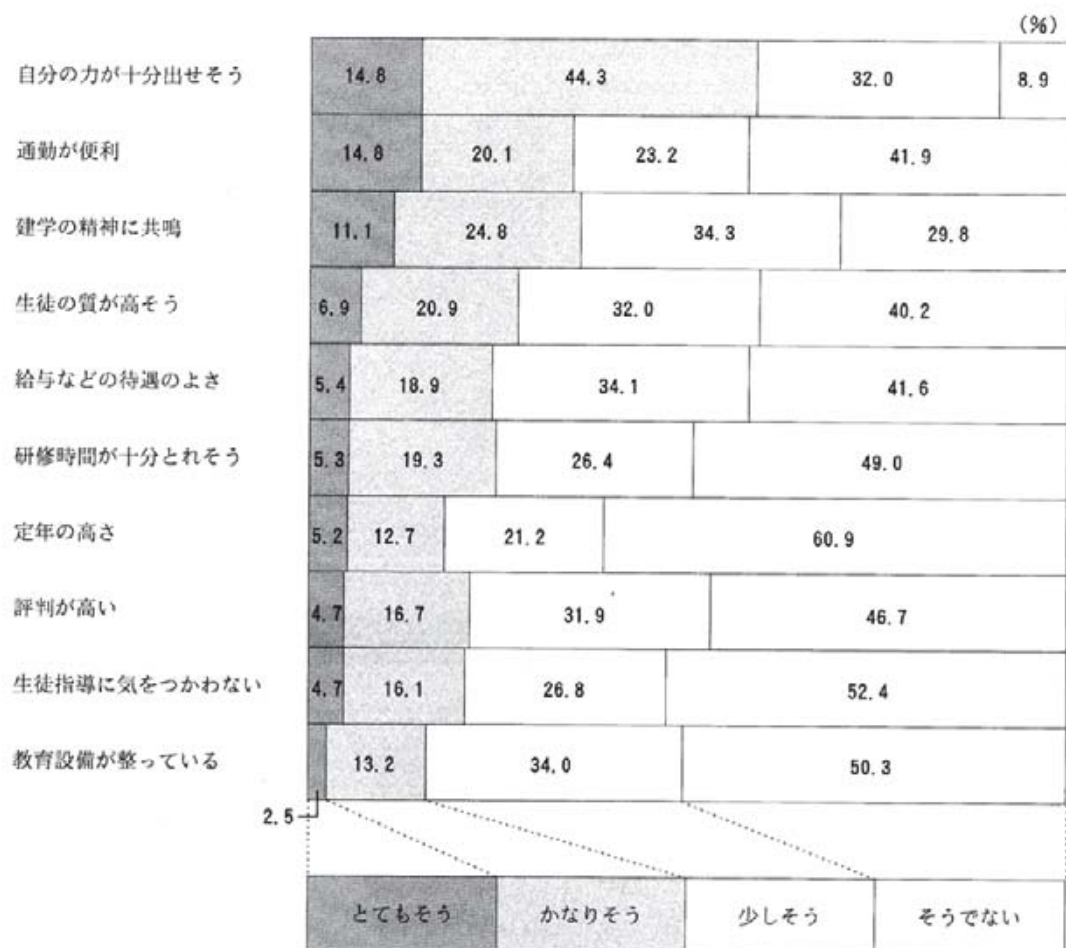


%にのぼっている。その反対に「別の学校にかわりたい」とする者は23.8%（「機会があれば」+「今すぐにでも」）にすぎない（図Ⅱ-4）。この2つから、勤務校に対しては、概ね肯定的にとらえているということが出来る。しかし、約4割が勤務校に「満足していない」と答えている事実も無視できないことを指摘しておきたい。また、「仮に新卒に戻れたとしたら、どの学校を選ぶか」（図Ⅱ-5）という設問では、「現在の学校」が35.6%でもっとも多い。しかも、「他の私立高校」

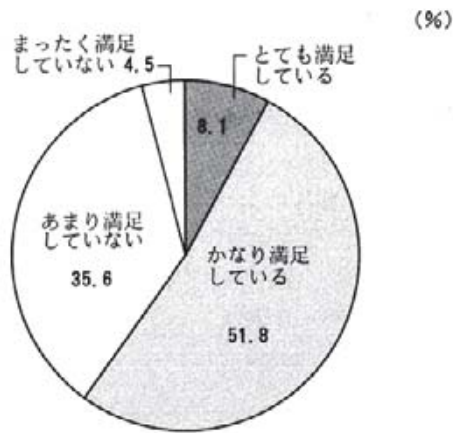
を合わせると、61.3%が勤め先として再び私立高校を選ぶと答えており、「公立高校」を選ぶという19.3%を大きく引き離している。

こうした結果から、私立高校教師は、異動のある公立高校よりも、自分にあった私立高校を見つけて、そこで定年まで教師を続けるというスタイルを志向しており、それが可能な私立に対して、よいイメージを抱いているということができる。

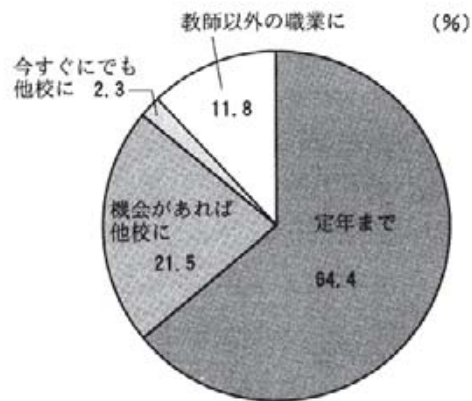
図Ⅱ-2 勤務校に対する魅力



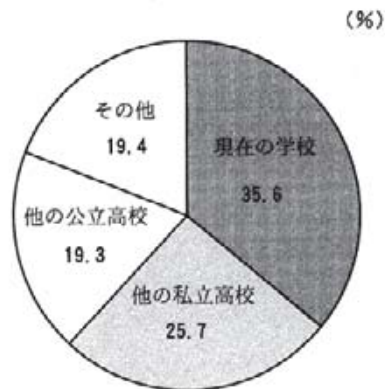
図Ⅱ-3 勤務校への満足度



図Ⅱ-4 現在の学校への勤務



図Ⅱ-5 新卒に戻れたら選択する学校





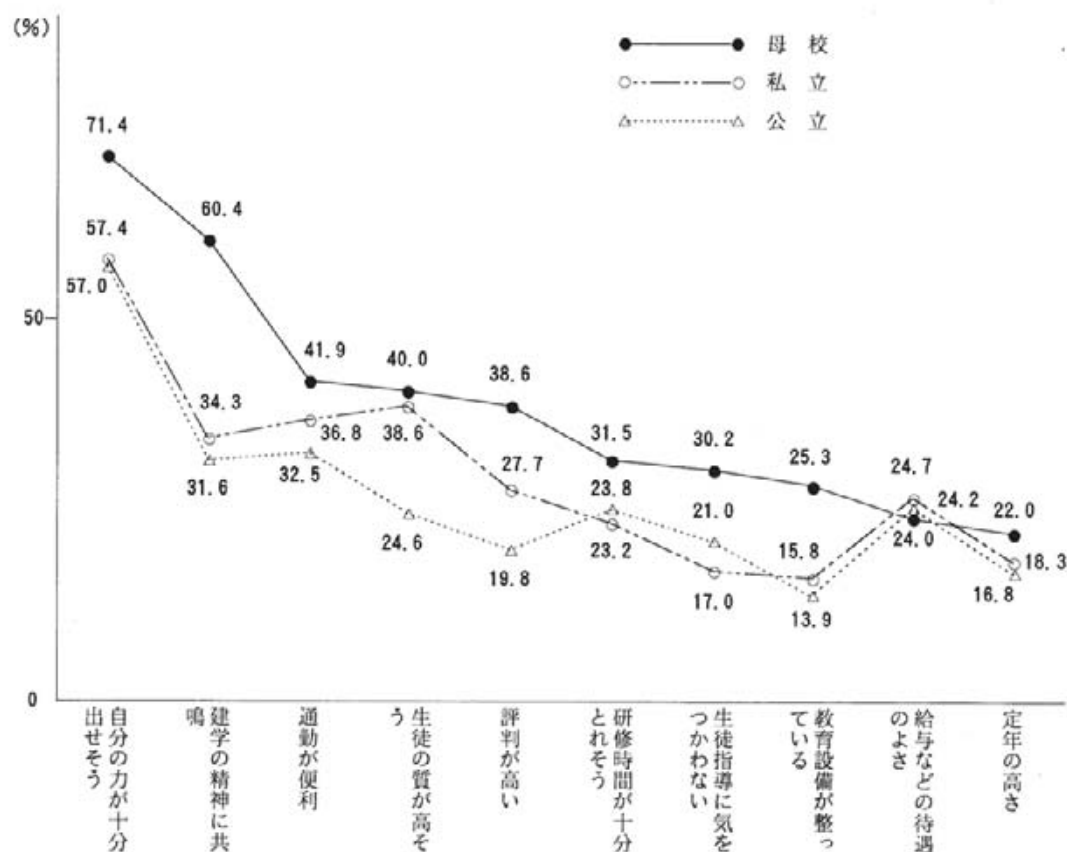
### 3. 母校出身の教師

私立高校教師は、学校の魅力を考慮しながら勤務校を選択している。そのため、勤務校への満足度が高くなるという傾向が示唆された。おそらく、この典型的な例は、母校に勤務する教師（以下、母校出身教師）であろう。というのも、母校出身教師は、就職する以前から勤務校についてよく知っている。その際、もし、母校に対して悪いイメージを抱いていたとしたら、積極的に母校への勤務を志向するとは考えられない。そこで、ここでは、勤務校以外を出身とする教師と比較しながら、母校出身教師は、勤務校に対してどのような魅力や不安を感じているのか、満足の度合い

がどうなっているのかを検討していくことにする。

図Ⅱ-6は、「現在の学校の魅力」について、出身高校別に示したものである。これを見ると、母校出身教師は、様々な側面で、勤務校以外の私立高校出身の教師（以下、私立出身教師）や公立高校出身の教師（以下、公立出身教師）よりも、多くの魅力を感じている。とりわけ、「建学の精神に共鳴」では、私立出身教師や公立出身教師に比べて、倍に近い数値を示している。これは、学生時代からすでに校風になじんでいたからであり、かつ、それを望ましいものと考えているからだ

図Ⅱ-6 勤務校に対する魅力（「とても+かなりそう」の割合）× 出身高校



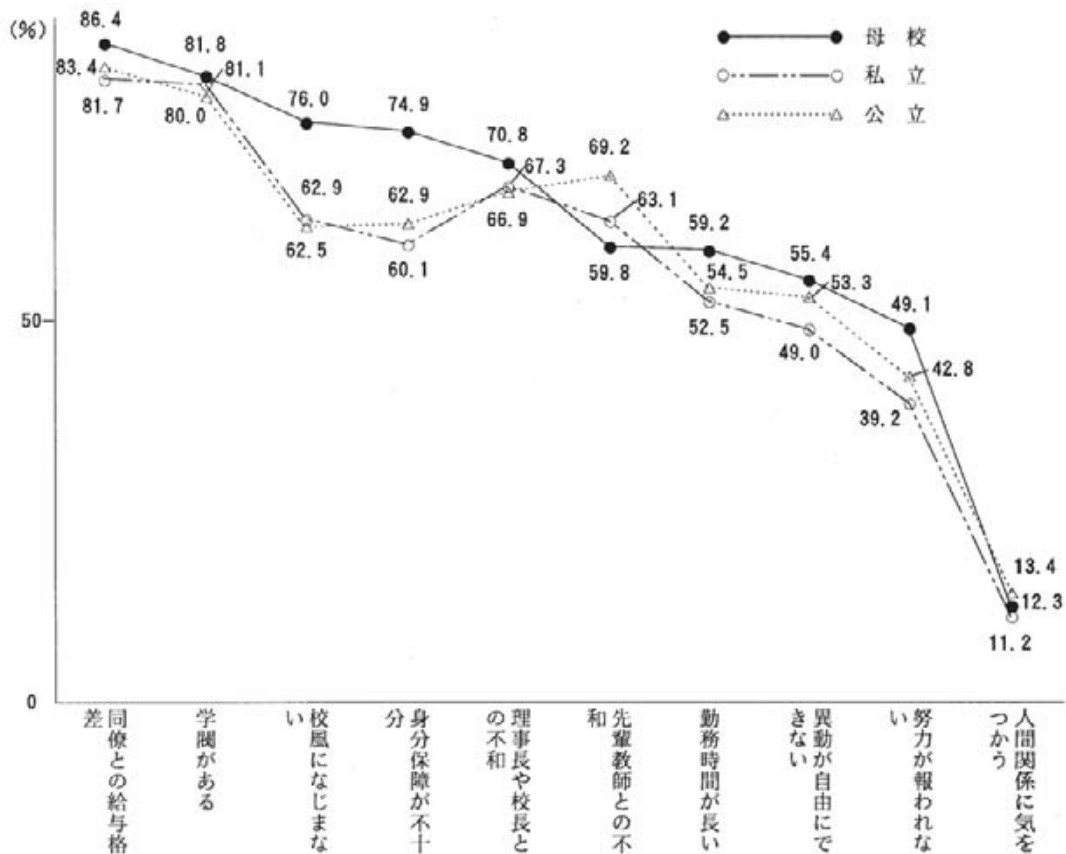
とみることができる。加えて、「生徒の質が高そう」「評判が高い」「生徒指導に気がつかわれない」などの項目でも魅力を感じる人が多い。これは、母校出身教師の多くが4年制大学進学率の高い、いわゆる進学校に勤務しているせいでもあろう。

つづいて、勤務校に感じている不安について問題にする。図Ⅱ-7は、不安が「ぜんぜんない」割合である。これをみると、「人間関係に気がつかう」「先輩教師とうまくいっていない」「学閥がある」など、職場の人間関係については、母校、私立、公立の各出身

教師間で差は小さい。しかし、母校出身教師は、「校風になじまない」「身分が十分に保障されていない」「勤務時間が長い」など、对学校に関する項目では不安を感じる事が少ない。つまり、学校との関係はきわめて良好である。母校出身教師は、あらかじめ十分な情報を持ち、かつ、愛着を感じる学校を選択するため、こうした結果になるのだと推察される。

このように、母校出身教師は、多くの魅力を感じて勤務校を選択している。加えて、他の学校出身の教師よりも、学校に対して不安

図Ⅱ-7 勤務校に対する不安(「ぜんぜんない」の割合) × 出身高校



を感じる事が少ないという傾向もみられる。それでは、彼らの現在の満足度は、どの程度であろうか。表Ⅱ-6から、次の2点が確認できる。

まず、第1に、母校出身教師をそれ以外と比較した場合、満足度を示す数値は大きく異なる。第2に、私立高校出身教師と公立高校出身教師を比較した場合、両者の満足度の数値に大きな差異はない。母校、私立、公立出身の順に、「勤務校に満足している」者は、71.1% > 57.9% ≒ 57.8%（「とても」+「かなり」）、「定年まで」現在の学校に勤務する

意思では、73.0% > 59.6% ≒ 64.5%、「新卒に戻れたら再び現在の学校を選択する」者は、61.2% > 31.0% ≒ 32.1%となっている。

私立出身教師と公立出身教師は、満足度に大きな差異はない。そして、勤務校についての十分な知識と愛着をもっていた母校出身教師だけが、とりわけ高い満足度を示している。彼らが教育現場での勤務を経験してから後も、満足度を高く維持し続けていることは、勤務以前の学校に対する知識と愛着、好意的なイメージの大切さとして注目されよう。

表Ⅱ-6 満足の程度 × 出身高校

(%)

		母校出身	私立出身	公立出身
勤務校への満足度	とても満足している	12.4	7.0	7.5
	かなり満足している	58.7	50.9	50.3
	あまり満足していない	26.5	36.5	37.8
	まったく満足していない	2.4	5.6	4.4
勤務意思	定年まで	73.0	59.6	64.5
	機会があれば他校に	13.8	26.1	21.1
	今すぐにも他校に	0.0	3.8	2.1
	教師以外の職業に	13.2	10.5	12.3
新卒に戻れたら選ぶ学校	現在の学校	61.2	31.0	32.1
	他の私立高校	14.1	35.7	23.2
	他の公立高校	9.4	15.0	23.9
	その他	15.3	18.3	20.8

## 第Ⅲ章 私立女性教師



この章では女性教師に焦点を当て、私立高校教師の中で女性はどのような役割を占めているのかを描きだすことを目的とする。しかし今回の報告では、女性教師に対するより細

かな分析や女性教師特有の問題を取り上げることは今後の検討課題とし、あくまでも男性教師と比較した場合の大きな特徴を浮き彫りにしてみたいと思う。

### 1. 女性教師の属性と生活時間

まずは、今回の調査対象者についてみることにする。年齢構成について男女別にみると、40歳以上の割合はほとんど変わらないものの、31～39歳は男性31.8%、女性は21.8%と男性が多くなっている。また30歳以下の者については男性の15.4%に対し女性は29.9%となっていることから、女性教師は年齢の若い層が多くなっていることがわかる。同様に、「現在の学校に赴任してから何年目か」との質問

に対して、「21年目以上」と答えた者が女性の23.8%に対し男性は32.1%となっていることから、女性のほうが勤務経験が短い層が多くなっている（「6年目以内」は男性23.4%、女性32.0%）。これらの数値から、本サンプルにおける女性教師は男性教師と比べ、年齢的にもまたキャリア的にも若い教師が集まっているといえよう。また、大学院卒については男性のほうが多いものの（男性25.0%、女

性12.5%)、出身大学のタイプ(私立・国公立/教育系・教育系以外など)に大きな傾向はみられない。これらの傾向は、分析を試みる際、念頭においておく必要があるだろう。

では、このようなサンプルを構成している教師たちは、一体どのような生活を送っているのでしょうか。まずは時間の使い方についてみていくことにする。

出勤時間について「50分以上前に出勤している」と答えた者は男性の26.2%に対し、女性は21.7%となっている。また、退勤時間が「7時以降」の者についてみた場合、男性は24.3%、女性は17.9%と差がでており、男性に比べ女性のほうが学校にいる時間が短いことがわかる。しかしこの傾向性は、運動系の部活動指導をしている者は男性の47.6%に比べ、26.0%と該当する女性教師の割合が低い

ことで、ある程度解釈することができそうである。

では教師たちは退勤後、どのような時間の使い方をしているのであろうか。「新聞・読書」「テレビ視聴」「教材研究・事務処理」の3項目について2時間以上費やしていると答えた者についてみることにする。この3項目の中でほとんど差がみられなかったのは、「教材研究・事務処理」で女性の21.3%に対し、男性は20.7%であった。性差がみられたのは残りの2項目であり、「新聞・読書」については男性24.1%であり、女性の12.4%に比べて2倍近くになっている。また「テレビ視聴」についても女性の19.7%に比べ、男性は26.4%と同じように多くの時間を費やしており、帰宅後の時間の使い方に性別による差がみられる。

## 2. 授業の形態

では私立高校教師はどのような授業を行っているのでしょうか。その授業形態における性差についてみていくことにしよう。

表Ⅲ-1は授業の進め方について「いつも+ときどきそうしている」と答えたものをまとめたものである。この設問に関して、性別による差は比較的小さい。男性教師のほうが「そうしている」と答えた割合が高かった項目はなく、女性教師のほうが高い割合となったのは「ノートのとおり方の指導」であり、「自分の欠点や失敗談を話す」であった。この項目から読み取れるような女性教師の指導のきめ細かさ、親近感を抱かせるような指導の方針は、次の「あなたは学校内で何をしているか」という設問においてより顕著に認められる。

学校ですることについてまとめたものが表Ⅲ-2である。「手作りの資料を使った授業」「小テストをする」「宿題を出す」「講義ノートを作る」「欠席した生徒に電話する」といった項目に対し、「よく+かなりする」と

答えた割合は女性教師に高く、きめ細やかで親密感を抱かせるような指導を心がけているといえそうである。一方、男性教師のほうが割合が高かった項目は「校内を巡視する」や「バイク指導」などであり、男性教師は生徒を管理するような役割を担っていることがわかる。

このように、実際の授業の方法における性差をみていったが、では自分のことを離れ、高校教師としてどのようなことが必要だと考えているのでしょうか。表Ⅲ-3は高校教師として「とても+かなり必要」とする要件をまとめたものである。まずこの表について私立と公立との差で比較してみた場合、私立高校教師は「校長や教頭の意見を聞く」「38度の熱があっても無理して学校へ行く」といった学校寄りの傾向性や「大学入試に役立つ授業をする」や「進学相談に適切な指導ができる」といった受験向きの授業を意識している傾向がみられる。

次に私立高校について、男女の傾向の差についてみることにする。上位1位・2位を占めたのは、男女ともに「進学相談に適切な指導ができる」「ホームルームの運営がうまい」であり、以下7位までの多少の順位の入替えは

あれ、すべて同じ項目があげられている。したがって、基本的には男女ともに同じような要件を高校教師に必要なものとしている。しかしながら、さらに性別による対比を試みると、「学級通信をこまめに出す」「一声で生徒を

表Ⅲ－1 授業の進め方

(%)

	男 性		女 性
教科書にそって授業をする	92.1		93.8
ノートのとり方を指導する	71.6	<	78.6
最近話題のニュースを話す	89.2		89.5
人気のマンガや音楽を話題にする	41.6		44.1
自分の子どもの頃のことを話す	75.3		76.5
自分の欠点や失敗談を話す	78.0	<	82.0

(「いつも+ときどきそうしている」割合)

表Ⅲ－2 学校でどのようなことをしているか

(%)

	男 性		女 性
手作りの資料を使った授業をする	52.0	<	56.8
小テストをする	28.7	<	38.1
宿題を出す	18.8	<	22.4
講義ノートを作る	49.9	<	55.4
担当教科の専門書を読む	60.8		60.6
雑誌や参考書の原稿を書く	9.8	>	4.2
校内を巡視する	20.3	>	16.5
バイクの乗車について指導する	16.8	>	5.8
欠席した生徒に電話する	57.6	<	65.6
問題を起こした生徒の家庭を訪問する	22.5		22.6

(「よく+かなりする」割合)

静かにさせられる『雑誌や参考書に執筆する』ということに対しては、男性教師のほうがより重要だとしている。その一方で、女性教師は「欠席した生徒の家に電話する」「学年全体の調和を考えて行動する」「校長や教頭の意見を聞

く」といった気配りや協調性についての項目を大事なことだとあげる割合が高くなっている。このようにしてみると、私立高校の場合、女性教師は男性教師に比べより細やかな気配りを伴った指導を心がけているといえるようである。

表Ⅲ－３ 高校教師として必要な要件

(%)

	私 立		公 立	
	男 性	女 性	男 性	女 性
専門性の高い授業をする	61.2	61.4	43.7	41.7
大学入試に役立つ授業をする	59.2	< 63.4	39.1	38.1
進学相談に適切な指導ができる	88.7	90.6	75.5	78.3
ホームルームの運営がうまい	84.3	86.8	81.5	81.4
学級通信をこまめに出す	20.1	> 16.7	18.4	< 23.5
部活動を熱心に指導する	59.1	> 52.7	59.6	> 54.0
気軽に生徒と雑談する	54.9	54.1	54.5	56.1
人気のテレビ・マンガに目を通す	9.9	10.8	10.6	11.9
一声で生徒を静かにさせられる	56.3	> 49.3	58.2	58.6
問題を起こした生徒を諭す	81.9	79.0	80.8	79.4
欠席した生徒の家に電話する	64.1	< 70.0	61.0	< 64.4
学年全体の調和を考えて行動する	73.5	< 79.6	75.3	75.9
校長や教頭の意見を聞く	50.5	< 54.6	30.8	> 17.7
38度の熱があっても無理して学校へ行く	21.6	19.8	14.9	> 11.2
雑誌や参考書に執筆する	10.4	> 4.6	3.9	2.4

(「とても+かなり必要」の割合)

### 3. 生徒とのコミュニケーション

前節では主に授業の形態をみていったが、女性教師のほうが細やかな指導をしている傾向がうかがわれた。実際の生徒とのコミュニケーションにおいても同様の傾向はみられるのであろうか。

最初にクラス担任をしている教師が、どの程度生徒についての知識をもっているかをみることにしよう。表Ⅲ-4はクラスの生徒についてどの程度知っているかを尋ねたもので

ある。私立高校の場合、10項目の全ての項目において女性教師のほうが知っていると言っている。また、このことは公立高校においても同傾向で、「通学方法」「部活動の状況」を除いては変わらないか、または女性教師のほうが知っていると言っている。したがって、公私を問わず生徒についての知識は女性教師のほうが把握しているということができよう。では、この傾向はどこから生じてくるので

表Ⅲ-4 クラスの生徒についてどの程度知っているか（担任をしている者に対して）

(%)

	私 立		公 立	
	男 性	女 性	男 性	女 性
出身中学校	49.9	< 59.5	45.1	< 51.8
通学方法	50.5	< 60.4	67.8	> 60.5
成績	93.2	< 98.4	89.9	< 95.5
授業態度	84.3	< 96.1	92.5	94.6
部活動の状況	85.8	< 92.6	87.3	> 82.6
趣味	31.0	< 45.5	33.6	< 49.1
通塾状況	45.2	< 63.8	50.4	< 57.8
アルバイトの状況	32.2	< 50.8	45.1	< 57.0
友人、友人グループ	64.3	< 87.3	68.6	< 84.4
家族構成	43.6	< 73.1	48.0	< 73.4

(「3分の2以上+半分くらいの生徒について知っている」割合)



あろうか。表Ⅲ－５はふだんの生徒との接触の仕方について表したものである。この設問に対しても、公私にかかわらず、性別によりはっきりとその傾向性が分かれていることがみられる。「授業中態度の悪い生徒を叱る」という項目を除いた６項目について、女性教師のほうが「よくある」と答えている。その６項目についてみてみると、「授業中よくできた生徒をほめる」「生徒からあいさつされる」「自分から生徒に声をかける」「生徒と廊下や職員室で話す」といったように、教師側から生徒とのコミュニケーションをもととする傾向が並んでいる。この傾向性に表されるような女性教師の姿勢が、「生徒から個人

的な相談を受ける」割合の高さや、前述したクラスの生徒についての知識の高さにつながっているのであろう。

またこの表から、「学校規範の中で価値を提示し生徒を叱る男性教師と、生徒とコミュニケーションを密にし、かつ励ますような女性教師」という図式が浮かんでくる。この設問にある種の偏りがみられることから一概にはいえないものの、しかし基本的には教師の世界において、ある程度家庭における伝統的な父親役割・母親役割に基づいた役割分業がなされているようであるということができよう。

表Ⅲ－５ ふだんの生徒との接触の仕方

(%)

	私 立		公 立	
	男 性	女 性	男 性	女 性
授業中よくできた生徒をほめる	39.6	< 45.6	36.7	< 44.9
授業中態度の悪い生徒を叱る	43.3	> 35.0	49.1	> 45.2
教科内容を生徒から質問される	29.8	< 34.3	17.7	< 21.0
生徒から個人的な相談を受ける	20.5	< 28.3	13.0	< 16.5
生徒からあいさつされる	73.6	< 87.3	62.1	< 74.7
自分から生徒に声をかける	51.8	< 64.3	48.5	< 63.7
生徒と廊下や職員室で話す	48.1	< 65.8	43.6	< 59.6

(「よくある」割合)

## 4. 女性教師が抱える悩み

では最後に、教師としての悩みについてみることにしよう。

教師の悩みについて性別・公私別にまとめたものが表Ⅲ-6である。この表にみられるように公私を問わず、男性教師より女性教師のほうが悩みを感じている割合が高いことが目につく。悩みを抱く割合が高い女性教師について、さらにより詳しく分析を試みることにしよう。その方法として、悩みについて尋ねた問い④の①～⑪の項目について女性だけ

を取り上げて因子分析を試みた。

この因子分析から、表Ⅲ-7のような因子が検出された。第1因子は「教師という職業が自分に向いていない」という項目に象徴されるような、教師という職業自体に対する悩みと解釈できる。第2因子は主に生徒との関係についての悩みといえよう。最後の第3因子は時間の使い方に対する悩みである。今回はこれら3つの因子の中で、誌面上の制約もあり、教師という職業自体に対する総括的な

表Ⅲ-6 現在抱えている悩み

(%)

	私 立		公 立	
	男 性	女 性	男 性	女 性
生徒の考えや行動についていけない	30.1	29.3	39.6	39.6
自分の専門的な力量に自信がない	25.9	< 37.6	22.5	< 40.4
生徒が騒々しくて授業を中断させられる	12.2	12.3	14.9	< 21.3
生徒の学力レベルが低く教えがいかない	24.0	23.6	35.9	34.4
自信をもって進路指導ができない	15.4	< 22.6	16.5	< 26.7
保護者と連絡をとったりするのが苦痛である	9.0	10.2	10.3	< 14.4
部活動の指導が負担である	25.4	> 16.2	22.0	< 27.3
校務分掌の仕事がうまくこなせない	10.1	10.5	8.4	9.1
雑用が多すぎる	66.1	< 78.3	73.7	< 78.6
研修の機会が少ない	58.0	< 73.2	59.6	< 75.3
教師という職業が自分に向いていない	13.0	< 19.7	13.9	< 24.3

(「とても+かなり感じている」割合)

悩みである第1因子について記述していくことにする。

図Ⅲ-1は第1因子について因子得点でみたものである。この場合、数値がプラス方向に高い者ほど、「教師に向いていない」という悩みを抱いていない（つまり「教師に向いている」）層である。逆にマイナス方向に高ければ高いほど「教師に向いていない」と思っている層である。またこの因子は「現在の学校に満足しているか」「定年まで勤めるつもりか」という2つの設問に対し相関関係にあることから、この悩みが強い者ほど現在の学校に対する不満足度や教職に対する拒否反応は強くなる傾向性をもつ。したがって、この因子はある程度の切実性をもった因子で

あるとみなすことができよう。

この図からみられる属性の傾向として、出身大学については悩みのない傾向が強いほうから順に、私立（教育系）→私立（教育系以外）・国公立（教育系）→国公立（教育系以外）の順になっている。また年齢についてみた場合、「教師に向いていない」という悩みを抱いている者は女性教師の中で年齢が若いことが目につく。逆にいえば、女性教師も、年齢とともに、教職へ自信をもち、悩みが少なくなっていく。

この章では女性教師の現状について大まかに概観していった。女性教師は、生徒との緊密なコミュニケーションを保ち、家庭における伝統的な母親に近い役割を担っている。こ

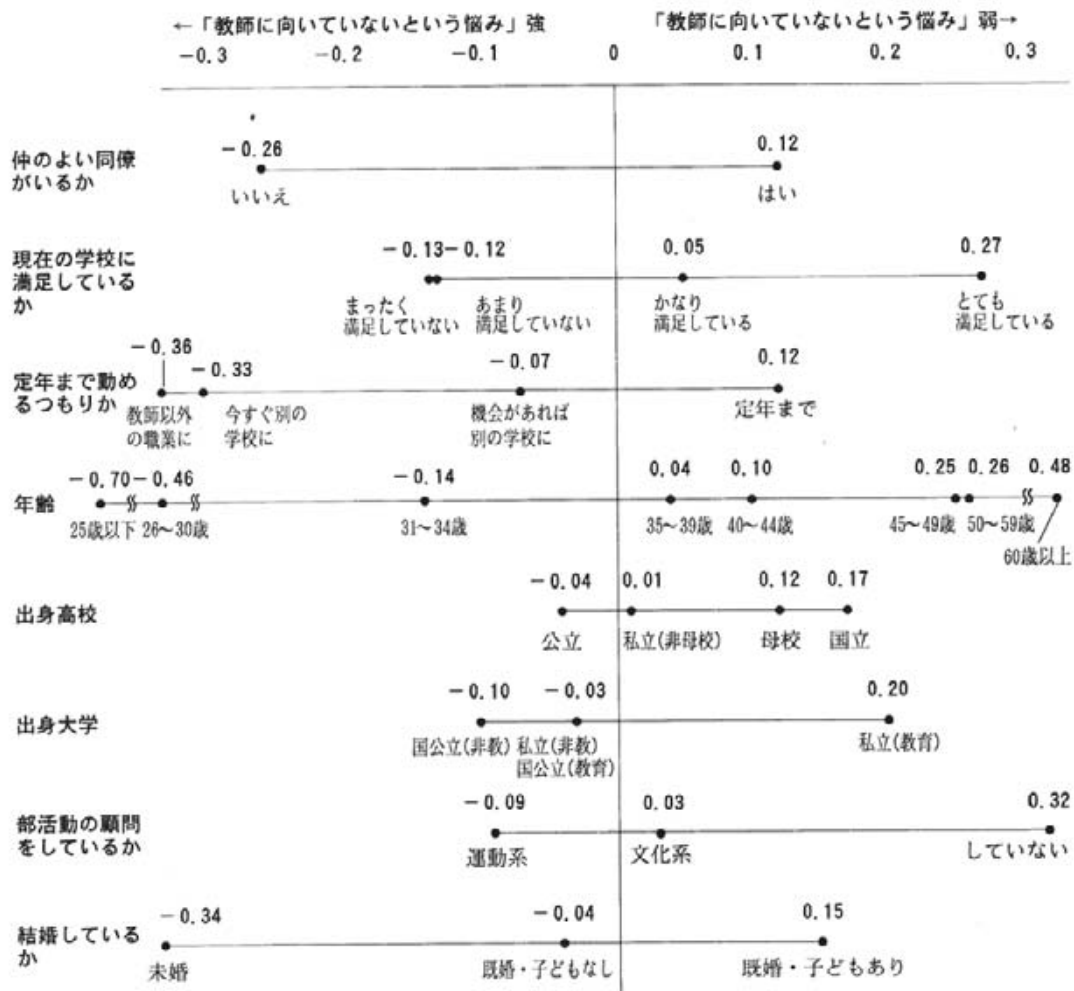
表Ⅲ-7 女性教師の悩みの構造（バリマックス法による因子の析出）

	教師に向かない悩み	生徒との関係での悩み	時間についての悩み
校務分掌の仕事がうまくこなせない	0.70211	0.02394	0.19986
保護者と連絡をとったりするのが苦痛である	0.68701	0.15975	0.01639
自信をもって進路指導ができない	0.67926	0.33749	-0.01718
自分の専門的な力量に自信がない	0.63806	0.09785	0.05419
教師という職業が自分に向いていない	0.51581	0.33600	0.12855
生徒の学力レベルが低く教えがいかない	-0.04891	0.79654	0.19249
生徒が騒々しくて授業を中断させられる	0.29870	0.68165	-0.11745
生徒の考えや行動についていけない	0.20977	0.55138	0.07246
雑用が多すぎる	0.13830	0.03322	0.82611
研修の機会が少ない	0.07579	0.12284	0.81193

の生徒との心的近しさはサンプルの年齢層が比較的若いせいもあるであろうが、それだけでは説明しきれない面もありそうである。また、このような女性教師の姿勢は自立を促す時期に当たる高校生に対して、どのような影響を与えるのか疑問が残る。そして何よりも、女性教師の悩みの抱く割合の高さが目につく。この悩みが女性教師としての悩みなのか、ま

たはこの年代の女性として生ずる悩みなのか今後の更なる検討課題としたいと思う。しかし、この悩みの高さは少なくとも、産休制度や休日が家族と一致することなど、女性にとって家庭と両立するには理想的な仕事であるとされる教職においてもなお、解決すべき問題があることを示しているのであろう。

図Ⅲ-1 「教師に向いていないという悩み」因子との関わり



## 第Ⅳ章 私立進学校教師の実像



近年、私立高校の人気は高まっている。このブームの背景には様々な要因——例えば、私立のほうが、しつこくきちんとしてくれるとか、生徒の質がよいとか、大学進学に有利であると思われることなど——が考えられる。

本章では、ブームの背景について、私立高校が行う教育的営為（教師による指導）が功をなしているのではないかという仮説を立てる。そして、私立高校教師の実態を把握しながら、検証を試みる。ただし、ブームの背景

は複雑に絡み合い、単一の要因による現象ではないことや、私立高校は高い偏差値や大学進学率を維持しているだけでなく、強いスクールカラーを出すことに成功しており、受験指導だけが期待されているわけではないこと等は、あらかじめ考慮しておかねばならない。本章ではこれらの点を踏まえたうえで、私立独特のカラーをもつ高校ではなく、受験指導を主眼としている進学校（4年制大学進学者の割合が9割以上）に着目しようと思う。

## 1. 学校格差別にみた 私立高校教師の属性

まず、本調査における回答者の分布を学校格差別に確認しておこう。調査対象者の特性（P. 8）からわかるように、4年制大学進学者が3割以下が38.3%、9割以上が23.7%であった（以下では前者を非進学校、後者を進学校とする）。この結果を公立高校教師と比較すると、4年制大学進学者の多い学校の割合が高く、少ない学校が低い。

また、進学校では、そうでない学校に比して、男性教師の比率が高いことがわかる。また、30歳以下の若年層が少なく、60歳以上の教師経験の長い者が多いという傾向もみられる。

次に、出身高校、出身大学および大学院についてみたところ、興味深い事実が明らかになった。それは、進学校ほど母校出身の教師が多いということである。このことは、生徒や親だけでなく教師の愛校心の高さを示していると思われるが、教師自身が職場に対する不適応を起こす可能性が低く、職業遂行も円滑にいくというメリットと考えてよいのではないだろうか。また進学校の教師は、教育系

以外の国公立大学出身者が多く、教師自身が母校から国公立大学に進学したキャリアをもっていると思われ、その経験が受験指導に役立っているかもしれない。さらに、進学校では大学院出身者が多く、専門性の高い授業を行っていることが推測される。このように、教師の属性には、学校格差による特徴が現れていることが明らかとなった。つまり、進学校においては、母校出身者や大学院出身者が多いという傾向があり、非進学校と異なる教師集団の文化が存在していると思われる。

最後に、併設状況を見ておこう。小学校から大学までの一貫教育を行っているのは、進学校にやや多く、中高一貫校も進学校にやや多いことがわかる。前者のようなエスカレーター式の学校では、大学進学者の割合が当然高くなり、受験指導校というよりはスクールカラー校であることが考えられる。しかし、後者のような中高一貫で大学進学指導を全面的に実施している学校は、トップレベルの大学をめざす、まさに進学重視の高校といえよう。

## 2. 教師研究における 学校格差という視点

ところで、高校教師の分析に当たり、学校格差という視点は、どのような意味があるのだろうか。本節では、この点について先行研究を用いながら確認しておくことにする。

先行研究において、現代の高校文化の生徒文化を規定する要因として、学校ランク影響の重要性が明らかにされてきた（武内清「高校生における学校格差文化」『教育社会学研究』第36集、東洋館出版社、1981など）。こ

れらの研究は、生徒文化の分化が、学校格差という外から学校に付与されたレッテル（チャーター）によって規定され、そのレッテルを内部のメンバーが当然のものとして受け入れていることによって生じるとする。このような外から与えられた学校格差というレッテルは、生徒だけでなく教師の側にも影響を与えている。例えば、耳塚（「高校生の生徒文化と学校経営(1)」『東京大学教育学部

紀要』第20巻、1981)が実証的に解明した、高校教師の対生徒パースペクティブに関する研究から得られる知見は、次のようである。進学校の教師は生徒の「従順性」(授業中おとなしく目立たない)や「授業中の逸脱」(勉強はできるが授業中私語が多い)を問題のある行動として捉え、非進学校の教師は「脱生徒役割」(生活力が旺盛で校則に違反する)を問題のある行動として捉えるが、「授業中の逸脱」は問題視しないという違いが存在する。

また、『東京都子ども基本調査(第5回)』では、教師-生徒関係が生徒の成績によって異なる結果となっている。「担任の先生とよく話す」「受け持ちの先生はあなたのことをよくわかってきている」「大きくなったら先生のようにになりたい」という項目から、成績(自己評価)の上位の子どものほうが教師に対して好意的であり、親密度が高いといえる。つまり、教師-生徒関係は、生徒の成績によって規定されているのである。

以上のように教師の生徒観や教師-生徒関係には、生徒の成績が重要であることがわかる。ところで、現在の高校においては、学校格差が生徒の客観的成績を示す指標となっている。そこで、本章では学校格差に注目してみようと思う。当然、学校格差は公立にも存

在するが、次の点で私立を取り上げることに意義があるといえる。それは、公立と違って私立の進学校は「受験第一」の教育目標を公然と掲げることができ、そのような授業を堂々に行えるという点である。また、教師も生徒も親も、そのような方針を受け入れる度合いが高いと考えられる。つまり、高校内部において価値観が統一され、その価値観が社会的にも認知されている点において、私立高校を取り上げる意義があるのである。

しかし、勤務高校が公立か私立かという区別が、教師のライフスタイルまでも規定してしまうような性質をもつとは考えにくい。そこで、本章では、授業場面や生徒観に関する質問項目を用いることにする。また、大学進学率が90%以上の進学校の教師を浮き彫りにすることを主眼とし、その比較として、非進学校(進学率30%以下)のデータを利用する。このように、進学率の高い高校を取り上げる理由は、近年の私立ブームという現象を支える意識の1つに、大学への進学の有利さが社会的に認知されていると思われるからである。さらに進学校の教師を非進学校の教師と比較することによって、進学に対する有利さが教師の努力によるものかどうかについて、手がかりを得ることができよう。

### 3. 進学校教師の特性

ここでは、私立進学校教師の基本的な特性について、他と比較しながら概観しておく。

私立高校の教師は公立のように、数年ごとに異動があるわけではない。多くの教師がその学校に長期にわたって勤務するので、勤務校に対して抱く意識や感情がよいものであることが望ましい。そこで、現在の勤務校に対する満足度や勤務継続の意思などを尋ねた。表IV-1からわかるように、勤務校に対して「とても満足している」と回答した教師は進学校に多い。また、新卒に戻れたら「現在の

学校」を選ぶと回答する者も、進学校に多い(表IV-2)。しかし、勤務継続の意思を尋ねたところ、進学校において「教師以外」とする者が多い(表IV-3)。これらの結果は、教師以外の道を選べるならそうしたいが、教師という職業につくなら現在の勤務校がもっともよいという考えの現れであろうか。

それでは、私立高校教師が勤務校に対して持つ不安の程度について、学校格差別にまとめた表をみよう。この結果をみると、すべての項目で、進学校は非進学校を上回っている。

すなわち、進学校のほうが、職場の人間関係もよく、雇用待遇もよく、不安をもっていないのである（表IV-4）。

これまでみてきたところでは、私立進学校の教師は、勤務校に不安はなく満足している。それでは、勤務校のどのようなところに魅力を感じているのか、その内実を明らかにしておこう。

表IV-5から、勤務校の魅力はどこにあると思っているかについて検討しよう。程度の差はあるものの、「通勤が便利になる」とい

う1項目を除く9項目において、なんらかの格差構造が出現している。

具体的にみると、進学校の教師は「建学の精神」や「評判」、「設備」という勤務校そのものに魅力を感じ、「給与」や「定年」などの待遇面にも魅力を感じている。また、「自分の力が出せそう」「研修の時間がとれそう」など教師としてのやりがいにも魅力を感じ、「生徒の質」や「生徒指導が楽」という対生徒関係にも魅力を感じているのである。学

表IV-1 勤務校への満足度 × 学校格差

(%)

	4年制大学進学者の割合				
	30%以下	30~59%	60~79%	80~89%	90%以上
とても満足している	4.3	9.0	6.8	10.2	13.4
かなり満足している	41.6	57.5	59.2	57.0	58.2
あまり満足していない	47.4	30.0	31.9	28.1	25.7
まったく満足していない	6.7	3.5	2.1	4.7	2.7

表IV-2 新卒に戻れた場合に希望する職場 × 学校格差

(%)

	4年制大学進学者の割合				
	30%以下	30~59%	60~79%	80~89%	90%以上
現在の学校	21.0	37.6	43.6	47.3	48.0
他の私立高校	32.4	28.4	20.7	22.8	18.4
他の公立高校	28.1	17.8	14.4	13.4	11.2
その他	18.5	16.2	21.3	16.5	22.4



校格差とはいえないにしろ、全体的傾向として、進学校のほうが勤務校に様々な魅力を感じているということはいえよう。

本節では、特に進学校に注目しながら、私立高校教師の特性を把握することを試みた。ここまでの結果を簡単にまとめておくと、以下のようなものである。

私立進学校の教師は、勤務校に対して様々な魅力を感じており、また満足度が高い。このように、進学校の教師は勤務校に対して非

常に好意的であるといえる。この理由としては、学校の経営状態が良好であり、教師たちに不安を与えることがないことや、母校出身の教師が多く愛校心が形成されやすいことなどがあげられるのではないだろうか。いずれにしても、雇用条件だけでなく、心理面でも勤務校に対して満足感を抱いていることは、望ましい状況であるといえよう。

表IV-3 勤務継続の意思 × 学校格差

(%)

	4年制大学進学者の割合				
	30%以下	30～59%	60～79%	80～89%	90%以上
定年まで	58.8	68.3	71.6	62.8	67.8
機会があれば他校に	26.6	19.1	19.5	24.8	14.7
今すぐにも他校に	3.4	2.0	2.1	0.8	1.2
教師以外の職業に	11.2	10.6	6.8	11.6	16.3

表IV-4 勤務校に対する意識 × 進学校/非進学校

(%)

	進学校	非進学校
校風になじんでいる	69.5	57.6
人間関係に気をつかわなくてよい	14.3	9.3
理事長や校長とうまくいっている	72.2	63.4
先輩教師とうまくいっている	67.6	64.0
身分が十分に保障されている	77.4	53.5
同僚と給与格差をつけられていない	87.7	77.9
異動は自由にできる	58.2	48.0
補習授業などで勤務時間が長くなることはない	67.7	46.4
努力は報われる	50.4	32.3
学問は幅をきかせていない	81.7	80.1

表IV-5 勤務校の魅力 × 学校格差

(%)

	4年制大学進学者の割合				
	30%以下	30~59%	60~79%	80~89%	90%以上
建学の精神に共鳴	3.5	16.4	10.5	17.3	17.7
評判が高い	0.8	4.3	3.7	3.2	11.7
教育設備が整っている	0.6	2.7	2.6	4.0	4.5
自分の力が十分出せそう	11.0	14.1	15.8	17.6	19.1
研修時間が十分とれそう	1.8	3.7	3.7	5.6	12.5
給与などの待遇のよさ	2.6	7.0	5.8	4.0	9.8
定年の高さ	4.8	4.8	4.2	4.8	6.7
生徒の質が高そう	0.6	6.5	4.2	8.0	17.1
生徒指導に気をつかわない	2.4	3.2	2.1	6.4	9.8
通勤が便利	17.4	15.7	12.6	5.6	15.5

(「とてもそう」の割合)

## 4. 私立進学校にみる指導

私立進学校の教師は、勤務校に対して抱く感情がよいことが明らかになったが、本節では私立高校で行われる授業を中心に考察してみよう。授業の進め方は、教師が勤務校に対してもつ好悪の感情よりも、生徒の学力レベルに規定されているであろう。しかし、ここでは、実際にどのような授業が行われているのかを確認しておく。

表Ⅳ-6から、「手作りの資料を使った授業」「小テスト」「講義ノートを作る」「担当教科の専門書を読む」のは、進学校の教師に「よくする」と回答する者が多いことがわかる。この結果から、生徒に問題が少ないため、教師は授業という本質的教育営為に集中できている実態が把握できる。

では、授業スタイルにはどのような違いがあるだろうか。

本調査では、授業に関する6つの質問項目を用意している(表Ⅳ-7)。また、生徒との接触の仕方を探る質問項目のうち、授業に関する2項目(「授業中態度の悪い生徒を叱る」「授業中よくできた生徒をほめる」)も

利用する。

進学校の教師にみられる授業スタイルは、「教科書にそった授業」や「ノートのとり方を指導」をしないというものである。前者について進学校では、受験指導が重視されるため、授業において教科書を利用しないことが推測できる。また、後者については、生徒の質がよく、授業や学習に臨む態度を指導する必要がないという推測が有力である。「授業中態度の悪い生徒を叱る」(進学校34.2%<非進学校44.4%)ことや、「授業中よくできた生徒をほめる」(38.8%<45.1%)など、授業に生徒を引きつける工夫は、非進学校でとられる授業スタイルであり、進学校ではそれらの工夫があまりされないという結果も援用できるであろう。

また、「生徒に人気のマンガや音楽を話題に」したり、「自分の子どもの頃の話を話」したり、「自分の欠点や失敗談を話」すという、授業におけるリズム感をつけたり親近感をもたせる工夫は、進学校においてはあまり行われない。このような結果は、4年制

表Ⅳ-6 授業への取り組み × 学校格差

(%)

	4年制大学進学者の割合				
	30%以下	30~59%	60~79%	80~89%	90%以上
手作りの資料を使った授業をする	18.4	23.4	26.2	31.5	29.9
小テストをする	13.5	15.2	16.4	16.5	19.3
講義ノートを作る	26.0	22.5	28.7	33.9	30.4
宿題を出す	9.8	9.4	11.3	10.3	9.3
担当教科の専門書を読む	22.1	21.2	29.2	31.3	37.6

(「よくする」割合)

大学進学者が8割を超す高校においてみられる傾向である。教師も生徒も受験の手段としての密度の濃い授業を自然に受け入れていることの現れではないだろうか。

ところで、以上みてきたような授業スタイルにみられる傾向は、公私にかかわらず進学校にみられる特徴なのか、あるいは私立進学校に特徴的なことなのかを検証してみよう。

ここでは、公立高校のデータに合わせて4年制大学進学率8割以上の高校について、公私を比較した(表Ⅳ-8)。また、同じ表に公私別の非進学校のデータも入れてみた。この表から得られる知見は様々だが、授業における親近感のたせ方における差が顕著であると思われる。「自分の欠点や失敗談」「自分

の子どもの頃のこと」を話す教師は、進学校では私立より公立のほうが、非進学校では公立より私立のほうが多い。この2項目は自分のことを話すことによって生徒に親近感をもたせようとする工夫であるが、私立の進学校では授業におけるこのような工夫があまりされないようである。それよりは「ノートのとおり方」という技術的な指導が行われているのである。

しかし、以上のような授業スタイルには、他の要因も影響していると思われる。例えば属性による差異を考慮すると、「ノートのとおり方」に関しては出身大学の影響が、「自分の欠点や失敗談」「自分の子どもの頃のこと」を話さないのは年齢構成の影響も考えられる。

表Ⅳ-7 私立進学校における教師の授業スタイル × 学校格差

(%)

	4年制大学進学者の割合				
	30%以下	30~59%	60~79%	80~89%	90%以上
教科書にそって授業をする	6.5	5.5	4.7	7.3	11.9
ノートのとおり方を指導する	22.3	19.1	25.0	33.6	35.3
最近話題のニュースを話す	8.1	9.0	12.0	14.2	13.1
自分の欠点や失敗談を話す	20.6	15.6	22.4	20.5	24.6
自分の子どもの頃のことを話す	24.3	18.5	20.3	29.9	28.7
人気のマンガや音楽を話題にする	56.2	56.3	53.9	64.8	61.0

(「ほとんどそうしていない」割合)

ここまでは、授業を中心に指導の有り様をみてきたが、次に、対生徒関係について考察してみよう。はじめに自分のクラスの生徒に関する個人情報をどのくらい知っているかについて、特に進学校に注目しながら検討する。

表Ⅳ－９をみよう。「出身中学校」については、進学校の教師の約６割が「３分の２以上・半分くらい」の生徒について知っている」と回答している。しかし他の項目についての回答から、進学校の教師は生徒の個人情報をあまり知らないという傾向がうかがえる。進学校の教師は、生徒に関する形式的な情報は得ているが、それ以外の情報には通じていないようである。教師にとって生徒の個人情報を知ることは、生徒指導の上で重要なことで

あるが、進学校においてはそのような必要がないということであろう。これは、私立のほうが問題のある生徒を退学にしやすいという性質をもつためかもしれない。私立は学校ごとに個性をもっており、入学者はそれに賛同していることが前提とされる。そのために、学校に合わなくなればやめてもらうという学校側の姿勢が強いと考えられるのである。

いずれにしろ、進学校の教師は生徒に密着しようとはせず、あるいはその必要がなく、ドライな関係であることが推測しうる。これは、生徒側でも、教師に依存する気がないということの現れかもしれない。

以上のように、進学校の教師と非進学校の教師の間には、授業や対生徒関係において、

表Ⅳ－８ 進学校／非進学校における教師の授業スタイル × 公私

	進学校		非進学校	
	私立	公立	私立	公立
教科書にそって授業をする	89.3	94.0	93.5	91.2
ノートのとり方を指導する	65.1	50.4	77.7	72.1
最近話題のニュースを話す	86.6	90.1	91.9	89.5
自分の欠点や失敗談を話す	76.5	82.0	79.4	76.7
自分の子どもの頃の話を話す	70.9	80.3	92.0	73.6
人気のマンガや音楽を話題にする	38.0	33.8	92.7	42.2

(「いつも+ときどきそうしている」割合)

若干の差異がみられた。このような差の生じる原因は、生徒の質にもよるもの大きいであろう。しかし、教師自身が教師のあり方についてどのような認識をしているかという側面も、確認しておく必要がある。そこで、教師のあり方に関する認識を尋ねた。ただし、質問文は「あなたの高校の教師として」の必要性を尋ねるものとなっている。

表IV-10は、「とても必要である」という回答の多い順に並べてあり、また比較のために、非進学校のデータも入れてみた。上位にあげられている項目を中心に検討しよう。この表は一方で教師という職業役割に対する意

識を、他方で進学校の特色をうかがい知ることができる。つまり、「ホームルームの運営」や「欠席した生徒の家に電話する」「問題を起こした生徒を諭す」という教師役割は、進学校だからといって軽視されるわけではない。また、「適切な進学指導」「専門性の高い授業」「大学入試に役立つ授業」は、進学校の教師のほうが重視する傾向がある。進学校の教師であるといえども、教師としてのあり方についての考え方には、特殊性があるわけではない。しかし、質問文のように、自分の勤務校について回答するとき、進学校としての特色が現れる。

表IV-9 生徒に関する個人情報の知識 × 学校格差

(%)

	4年制大学進学者の割合				
	30%以下	30~59%	60~79%	80~89%	90%以上
出身中学校	<u>44.3</u>	57.0	58.4	<u>59.7</u>	59.0
通学方法	56.8	56.1	<u>64.0</u>	57.0	<u>44.4</u>
成績	94.2	96.8	94.4	<u>97.2</u>	<u>93.5</u>
授業態度	<u>95.3</u>	95.1	94.4	<u>93.0</u>	94.5
部活動の状況	<u>90.6</u>	87.9	89.6	90.2	<u>80.3</u>
趣味	<u>36.9</u>	<u>32.0</u>	36.8	36.1	33.1
通塾状況	49.5	49.6	<u>59.2</u>	53.5	<u>46.5</u>
アルバイトの状況	39.1	<u>42.8</u>	33.6	40.0	<u>33.5</u>
友人、友人グループ	<u>75.1</u>	74.2	71.2	73.7	<u>60.4</u>
家族構成	55.5	<u>55.7</u>	54.4	48.6	<u>44.5</u>

(「3分の2以上+半分くらいの生徒について知っている」割合)

○ = 最大値  
 — = 最小値

表Ⅳ-10 教師のあり方に対する考え方 × 進学校/非進学校

(%)

	進学校		非進学校
1. 進学相談に適切な指導ができる	45.2	1. ホームルームの運営がうまい	45.1
2. ホームルームの運営がうまい	38.6	2. 進学相談に適切な指導ができる	43.3
3. 専門性の高い授業をする	34.6	3. 欠席した生徒の家に電話する	35.6
4. 問題を起こした生徒を諭す	32.9	3. 問題を起こした生徒を諭す	35.6
5. 学年全体の調和を考えて行動する	27.5	5. 学年全体の調和を考えて行動する	29.9
6. 欠席した生徒の家に電話する	26.0	6. 部活動を熱心に指導する	23.9
7. 大学入試に役立つ授業をする	22.8	7. 一声で生徒を静かにさせられる	22.0
8. 一声で生徒を静かにさせられる	20.1	8. 専門性の高い授業をする	21.0
9. 気軽に生徒と雑談する	18.3	9. 気軽に生徒と雑談する	18.1
10. 部活動を熱心に指導する	17.2	10. 大学入試に役立つ授業をする	14.2
11. 校長や教頭の意見を聞く	10.0	11. 校長や教頭の意見を聞く	13.4
12. 38度の熱があっても無理して学校へ行く	6.3	12. 38度の熱があっても無理して学校へ行く	6.3
13. 学級通信をこまめに出す	4.5	13. 学級通信をこまめに出す	5.1
14. 雑誌や参考書に執筆する	3.0	14. 雑誌や参考書に執筆する	2.8
15. 人気のテレビ・マンガに目を通す	2.7	15. 人気のテレビ・マンガに目を通す	2.2

(「とても必要」の割合)

## 5. まとめ

本章では、私立進学校の高校教師に注目しながら考察してきたが、最後に簡単にまとめておこう。

① 私立進学校における教員構成にみる特徴は、若手が少なく、男性が多く、大学院出身者が多いということである。さらに、勤務校が母校であるという教師も多い。これは、独特の教員文化を形成する可能性が高い。

② 私立進学校における教師は、勤務校に対する不安が少なく、満足している。

③ 生徒とは、親密度が低い傾向があるが、これは生徒の質による影響が考えられる。

私立高校では異動が少ないため、教員集団の凝集性が高いという構造的特質をもつ。凝集性の高い集団において、①、②のような特性が作用し、教師間に「愛校心」が形成されやすい環境が生み出されているのではないだろうか。そしてそのような「愛校心」は、①、②のような属性をもたない教師や、新しい成

員にもインパクトを与え、「愛校心」が全体的なものへと拡大する。その上、高校内部には強い受験動機によって高い倍率を潜り抜けてきた生徒が存在し、それを支える親が存在する。教師、生徒、親の三者が一体となって「愛校心」の拡大に寄与し、私立進学校の現在の地位が定着した。さらに、学校外部からもイメージのよいレッテルを貼られ、学校の存在が社会的に認知される。プームの背景の1つには、このようなプロセスがあったのではないかと思われる。冒頭の仮説に立ち戻って教育的営為という側面から答えるなら、その営為とは「授業」における指導ではなく、教師自身のもつ「愛校心」という不可視的な心理の作用というべきであろうか。

繰り返しになるが、本調査の結果から、学力の高い生徒と愛校心の強い教師が作る学校文化が、私立進学校を支えているということは、少なくともいえるであろう。



## 第V章 併設タイプ別にみた私立高校の教育



私立高校は、建学の精神が教育方針に反映してスクールカラーが個性的である学校が多い。それに加えて、学校の形態に注目しても、「男子校－女子校－共学校」「中高一貫校－大学附属校－他に併設校をもたない高校」など、公立高校にはない種々の特徴がある。これだけ多様性に富んでいる私立高校を、一枚岩で捉えることはできない。前章からもわかるように、私立進学校といっても、その内実

は様々である。

そこで、本章では、私立高校の特徴の1つである「併設校」について、特別の関心をはらってみたい。さて、教育的営為（教師による指導）は、「併設校の有無」によって変わるのだろうか。さらに、小、中、大学のどの段階を併設しているかという「併設状況」の違いによって変わるのだろうか。

### 1. 私立高校の併設タイプ

われわれは、「併設校の有無および併設状況で教育的営為は異なる」という仮説を設定し、高校のタイプを以下の4つに分類した。（〈 〉内は各タイプの割合）

- ① 高校単独校（高校のみ）〈20.0%〉－他に併設校をもたない高校。
- ② 中高一貫校（中・高型）〈30.0%〉－併設校に中学をもつ高校。中高を通じて一貫

教育を行う。

③ 大学附属校（高・大型）〈11.7%〉一併設校に大学（短大を含む）をもつ高校。

④ エスカレーター校（小・中・高・大型）〈17.0%〉一併設校として下に小、中学校を、上に大学をもつ高校。小学校から大学までの一貫教育を行う。

ここで、各タイプの教師の基本的属性にみられる特徴を確認しておきたい。

はじめに、4年制大学進学者の割合（表V-1）である。表によれば、高校単独校は、進学率30%以下の非進学校に多い。他方、中高一貫校、大学附属校、エスカレーター校には、進学率90%以上の学校が多いことがわかる。だが、「進学率の高い学校が多い」とい

う点で同じだからといって、後者3タイプの高校を「進学校」としてひとまとめにすることはできない。それぞれは異なる特徴をもっているだろう。

たとえば、各タイプの教師の性別と年齢（表V-2）を概観すると、次の諸点で違いがみられる。

① 性別では、大学附属校に男性教師が多く、エスカレーター校に女性教師が多い。

② 年齢では、大学附属校に40～59歳のベテラン教師が多く、エスカレーター校は30歳以下と60歳以上に分化している。高校単独校と中高一貫校は、ほぼ平均に近い分布である。

前章では、進学校に「男性教師」が、また、「年齢の高い教師」が多い傾向を提示したが、

表V-1 4年制大学進学者の割合 × 併設タイプ

(%)

	4年制大学進学者の割合					
	30%以下	30～59%	60～79%	80～89%	90%以上	よくわからない
高校単独	65.9	9.5	6.3	6.3	11.6	0.4
中高一貫	29.6	14.2	16.8	8.0	30.0	1.4
大学附属	30.5	12.0	15.0	16.8	25.7	0.0
エスカレーター	25.7	11.2	15.4	12.4	34.5	0.8

表V-2 性別・年齢 × 併設タイプ

(%)

	性別		年齢				
	男性	女性	30歳以下	31～39歳	40～49歳	50～59歳	60歳以上
高校単独	76.5	23.5	21.4	29.2	23.1	21.4	4.9
中高一貫	74.0	26.0	18.7	31.8	25.1	19.7	4.7
大学附属	87.4	12.6	15.0	22.8	34.6	23.4	4.2
エスカレーター	64.9	35.1	19.8	32.6	20.7	17.8	9.1

○ = 最大値

この表からは、中高一貫校、大学附属校、エスカレーター校に共通して、これら進学校の特徴がみられるわけではない。また、高校単独校に「女性教師」や「若手教師」の集中が顕著であるといった現象もみうけられない。

次に、出身学校に関する進学校の特徴は、「母校を勤務校とする教師」や「大学院出身者」が多いことであった。この点について検討すると、まず、「母校出身教師」が平均(12.0%)以上いるのは、エスカレーター校(18.8%)のみで、あとはすべて平均以下で

ある。ただし、「大学院出身者」は、「高校単独校12.0%<中高一貫校18.5%、大学附属校23.2%、エスカレーター校26.4%」で、後者3タイプの割合が高い。したがって、後者3タイプが進学校にみられた特徴として共通に有しているのは、唯一、「大学院出身者が多い」という点のみである。

これらを総合して考えると、高校単独校が非進学校の特徴をもち、その他の3タイプが進学校的な特色をもつという単純な枠組みは成り立たないといつてよいだろう。

## 2. 併設タイプ別にみた教育の特徴

それでは、併設校の有無および併設状況によって、どのように教師による指導が変わってくるのかを検討することにする。なお、ここでは、教育的営為を「授業・学習指導」「対生徒コミュニケーション」「生活指導」の3つに分けて考察した。

まず、「授業・学習指導」面での各タイプの教師の行動をまとめたのが、表V-3である。

① 高校単独校に勤務する教師は、授業中に「人気マンガ・音楽」や「自分の子どもの頃」「自分の欠点・失敗談」などについて話したり、「よくできた生徒をほめる」「態度の悪い生徒を叱る」など、授業を活発化させ、生徒を引き入れるような努力をしている。しかし、「担当教科の専門書を読む」ことは少なく、「手作り資料の授業」や「小テスト」を行う割合も低い。これらは、非進学校にみられる授業スタイルである。

② 中高一貫校の教師は、「手作り資料の授業」「小テスト」をしたり、生徒に「宿題」を課すことが多い。その一方で、「教科書にそった授業」や「ノートの指導」などはあまり行わない。これらは、進学校にみられる特徴といつてよい。

③ 大学附属校の教師は、「教科書にそっ

た授業」を行う者が多い。さらに、「人気マンガ・音楽」や「自分の子どもの頃」の話をすることも少なく、「講義ノートを作成」「手作り資料の授業」「小テスト」「宿題」などを行っている割合も低い。これらを総合すると、高校単独校のような生徒を授業に引きつけるための努力は必要ないが、かといって、中高一貫校のような受験指導を行うこともないという、大学附属校の特徴があらわれている。

④ エスカレーター校の教師は、大学附属校の教師にやや似ている。「教科書中心の授業」で、「よくできた生徒をほめる」ことや、「態度の悪い生徒を叱る」ことは少ない。しかし、「講義ノートを作成」して授業に臨んだり、「話題のニュース」について話したりと、レベルの高い授業を行っていることをうかがわせる。

さて、以上から、各タイプの学校はそれぞれの状況にあわせて学習指導を行っていることが明らかになった。繰り返すと、高校単独校では専門性は低いが、活発で面白い授業が、中高一貫校では受験指導が行われている。さらに、大学附属校とエスカレーター校は教科書中心に、あまり活発とはいえない授業が進

められている。ここでは捉えきれないが、これらの学校は併設校に大学をもっているので、建学の精神を反映した個性的な授業を行っていることに特徴があるのだろう。

つづいて「生徒とのコミュニケーション」に注目する(表V-4)。生徒ともっとも緊密な関係を保っているのは、エスカレーター校の教師である。「教科内容について質問される」「個人的な相談を受ける」「あいさつされる」「廊下・職員室で話す」などの割合はいずれも高く、生徒との信頼関係を築いてい

る。また、高校単独校の教師も、「自分から声をかける」「生徒と一緒に掃除をする」など、自ら積極的にコミュニケーションをはかっている。それに対して、大学附属校の教師は、「あいさつされる」「自分から声をかける」「廊下・職員室で話す」「生徒と一緒に掃除をする」などの項目でいずれも最小値を示しており、生徒との交流が不活発な様子がかがえる。大学附属校とエスカレーター校は、大学が併設校にあるため、授業場面での指導は似ていた。ところが、ふだんの対生徒関係

表V-3 授業の方法・学習指導 × 併設タイプ

(%)

	高校単独	中高一貫	大学附属	エスカレーター
A 教科書にそって授業をする	64.3	59.8	67.5	64.7
B ノートのとり方を指導する	24.8	16.3	19.5	21.8
C 最近話題のニュースを話す	31.3	27.9	29.1	32.5
D 自分の欠点や失敗談を話す	10.5	5.3	2.5	4.7
E 自分の子どもの頃の話を話す	8.5	9.0	7.9	8.1
F 人気のマンガや音楽を話題にする	9.6	9.5	9.1	8.5
G 授業中よくできた生徒をほめる	44.5	41.5	38.8	36.3
H 授業中態度の悪い生徒を叱る	43.6	42.2	41.2	36.1
I 手作りの資料を使った授業をする	45.7	57.0	51.8	56.3
J 小テストをする	26.2	35.1	28.4	31.2
K 宿題を出す	22.0	27.0	20.7	20.1
L 講義ノートを作る	48.6	53.9	47.8	57.1
M 担当教科の専門書を読む	55.8	63.0	62.4	61.7

○ = 最大値    — = 最小値

※A~F: 授業中にどのくらいしているか(数字は「いつもそうしている」割合)  
 G・H: ふだん生徒との間でどのくらいあるか(数字は「よくある」割合)  
 I~M: 学校内でどのくらいやっているか(数字は「よく+かなりする」割合)

では、小、中学をもつエスカレーター校が、もたない大学附属校よりもはるかによいことがわかる。また、高校単独校にみられる生徒への働きかけは、生活指導の必要上生まれてくるのだろう。

そこで、最後に「生活指導面」での教師の活動(表V-5)についてみる。高校単独校の教師と大学附属校の教師は、「校内巡視」「バイク指導」「欠席生徒に電話」「問題を起こした生徒の家庭訪問」のいずれでも高い数値を示している。これは、高校単独校や

大学附属校が、ややもすると生徒を管理する方向に流れやすいことを示している。反対に、エスカレーター校の教師は、いずれの項目も行っている比率が低い。エスカレーター校の教師は、生徒との関係のよさを反映して、生徒の自主性に任せる教育方針をとっているようだ。そして、中高一貫校の教師は、生徒とのコミュニケーションについても、生活指導の面でも、両者の中間的な数値を示している。

ここまで、「併設校の有無および併設状況によって教育的営為は異なる」という仮説を

表V-4 対生徒コミュニケーション × 併設タイプ

(%)

	高校単独	中高一貫	大学附属	エスカレーター
O 教科内容を生徒から質問される	23.0	33.5	29.7	36.6
P 生徒から個人的な相談を受ける	23.8	19.9	22.2	29.1
Q 生徒からあいさつされる	75.2	74.4	69.7	83.2
R 自分から生徒に声をかける	60.6	53.2	48.2	57.1
S 生徒と廊下や職員室で話す	56.2	48.8	44.6	61.3
T 生徒と一緒に掃除をする	49.1	46.5	37.6	44.5

○ = 最大値    — = 最小値

※O~T: ふだん生徒との間でどのくらいあるか(数字は「よくある」割合)

表V-5 生活指導 × 併設タイプ

(%)

	高校単独	中高一貫	大学附属	エスカレーター
U 校内を巡視する	21.3	17.8	20.6	18.0
V バイクの乗車について指導する	20.5	13.4	22.7	5.2
W 欠席した生徒に電話する	60.0	64.4	59.9	50.4
X 問題を起こした生徒の家庭を訪問する	26.9	20.8	29.8	16.9

○ = 最大値    — = 最小値

※U~X: 学校内でどのくらいやっているか(数字は「よく+かなりする」割合)

検証してきたが、各タイプ別にまとめると、おおよそ以下のことがいえるだろう。

① 高校単独校の教師は、生徒を引きつけるような授業を行うよう努力している。さらに、授業以外の場面でも、自ら生徒との交流をはかり、生活指導も積極的に行っている。

② 中高一貫校の教師は、進学校に特有の授業を行っている。しかし、対生徒関係や生活指導では平均的な私立高校教師像に近く、偏った傾向はみられない。

③ 大学附属校の教師は、教科書中心の授業を行い、授業場面での活動の活発さはあまりみられない。また、ふだんから対生徒コミュニケーションが少ない傾向もある。しかし、生活指導に関しては比較的積極的である。

④ エスカレーター校の教師は、生徒と親密な関係を保つことに成功し、信頼関係を築いている。そのため、自ら進んで生活指導を行うことはあまりないようで、生徒の自主性に任せた教育をしているところに特徴がみられる。

### 3. 併設タイプ別にみた教師の意識

最後に、「教師の意識」に注目して、併設校の有無や併設状況が教育的営為を規定する実態を指摘しておこう。

表V-6は、「あなたの高校の教師としてどれくらい必要か」という設問に対する回答を、併設タイプ別にまとめた結果である。各タイプにみられる特性は、前節で提示した彼らの日常行動の違いと合致している。例えば、併設タイプによって、次のような意識の違いがみられる。

① 高校単独校の教師が必要だと考える割合が高いのは、「気軽に生徒と雑談」したり、「人気テレビ・マンガに目を通す」などの対生徒コミュニケーションを促進する項目である。その一方で、「大学入試に役立つ授業」や「適切な進学指導」など受験に関わる項目は、あまり重視していない。

② 中高一貫校の教師は、受験に関する項目で著しく高い数値を示している。そのうえ、「問題を起こした生徒を諭す」「学級通信をこまめに出す」などの教師役割全般に関しても、必要だと考える者が相対的に多い。

③ 大学附属校の教師は、「気軽に生徒と雑談すること」や「人気テレビ・マンガに目を通す」ことを、必要だと考える者が少ない。さらに、「専門性の高い授業」を志向する割合も低い。

ところで、IV章でも述べたように、「専門

性の高い授業をする」「大学入試に役立つ授業をする」「適切な進学指導をする」といった学習・進学指導に関する項目では、非進学校よりも進学校の教師のほうが「必要」と考える割合が高い。しかし、私立高校について考察する場合は、こうした学校格差に加えて、併設タイプを考慮する必要があるだろう。

さて、進学率90%以上の学校は、高校単独校11.6%、中高一貫校30.0%、大学附属校25.7%、エスカレーター校34.5%であった。後者3タイプは、進学率の分布だけを見ると同様の傾向がみられる。それにもかかわらず、「入試に役立つ授業」が必要と考える教師は、中高一貫校で71.6%と際立って高い（大学附属校56.7%、エスカレーター校58.4%）。すなわち、大学が併設校として存在するか否かで、授業の方針が大きく異なる様子を示しているのである。大学附属校やエスカレーター校は、進学率がよいといっても受験準備教育に特化しているわけではない。

次に、進学校の特徴としてみられた「専門性の高い授業」を必要と考える教師であるが、これは、中高一貫校が63.6%でもっとも多い。だが、最小値は大学附属校52.1%で、高校単独校56.0%よりも低い数値を示しているのである。したがって、単純に進学率の違いだけでは考えられない要素が含まれていると推

察される。

これらのデータから総合すると、「併設校の有無・併設状況」が「教師の意識」に影響を与え、それが「日常の教育的営為」を規定するという傾向が示唆されているといえる。

私立のように多様性に富む学校文化について考察する場合、(学校格差だけでなく)本章で提示した「併設タイプ」など、これまで顧みられることの少なかった視点を導入することが、今後、一層必要であろう。

表V-6 教師のあり方に対する考え方 × 併設タイプ

(%)

	高校単独	中高一貫	大学附属	エスカレーター
専門性の高い授業をする	56.0	63.6	52.1	58.8
大学入試に役立つ授業をする	50.7	71.6	56.7	58.4
一声で生徒を静かにさせられる	53.9	56.7	54.0	55.9
進学相談に適切な指導ができる	82.0	91.2	89.2	91.6
気軽に生徒と雑談する	57.6	52.5	48.8	56.3
人気のテレビ・マンガに目を通す	12.8	10.5	6.7	10.4
問題を起こした生徒を諭す	79.1	81.6	79.4	81.4
ホームルームの運営がうまい	86.2	84.2	83.2	82.8
学級通信をこまめに出す	20.7	21.2	20.5	14.7
部活動を熱心に指導する	58.4	57.8	60.2	49.6
欠席した生徒の家に電話する	65.2	68.0	68.6	56.5
学年全体の調和を考えて行動する	71.5	77.2	72.1	74.5
校長や教頭の意見を聞く	47.2	52.6	48.4	52.3
38度の熱があっても無理して学校へ行く	19.7	19.0	24.7	22.7
雑誌や参考書に執筆する	7.1	8.5	11.5	7.9

○ = 最大値    — = 最小値  
(「とても+かなり必要」の割合)